

面白く興ある事に思つたので、

左も愉快そうに、

「おゝそうか……それはまあ態々氣の毒だつたなア今戸を明けてやるからマア上つて寛くり話して行くがいゝや、お前達の好きな酒もあるから飲んでおいでよ」

「有難う存じますが却つて戸を明けて下さると困るのですから何卒此のまゝにしてお置き下さい……就きましては何かお禮を致したいと思ひますが御存じの通り我々の事で御座いますからお禮の致しやうもございません……切て月夜の晩にでも伺ひましてお庭先でお手

のもの、腹鼓みでもお聞かせ申したう御座いますが無何でせう？……」

「そりや結構だ何うか聞かしてくれ」

と、云ひながら、狸公の奴めどんな風をして人間並に物を云ふのか見たいものだ素堂書伯は窃つと戸の際に進み寄り突然ガラリと雨戸を開けて見たが此の時には最ふ狸公は夫れと察したもののか姿も影も見えなくなつてしまつた、

翌くる朝になると、書伯は、花子夫人や書生に向つて、

「お前達は昨夜珍らしいお客さんが來たのを知つて居るか」

と、尋ねる。

「あらッそんなお客さんは誰れも入らつしいませんか……」

「所が来たのだ……」

「だつて十一時まで起きて居て皆と一緒に寝ただではございせんか」

「アハハ、それぢや全く知らんやうだから話して聞かそう、昨夜

十二時過に狸が禮に来たよ……」

「まあ狸が禮に来るなんて……」

「一昨夜助けたのが小犬だと思つたら狸公の子であつたのだあんな

ものでも親子の情愛があつて嬉しい有難いと思つて態々禮に来るなんて感心なものだよ、そして禮として持つて来るものがないから月夜の晩に此所へ来て腹鼓を打つて聞かしてくれるさうだが何日来るやら……何んな音がするやら楽しみの事だよ……」

と、喜んで待つて居る。

花子夫人は何んだか氣味悪がつて居たが素より禮に来る位であるから家族の人を驚かしたり害を與へるやうな事はないと、承知はして居るものゝ何んだか氣味が悪いなど云つて、月夜の晩などは外でもせず居られた。

而し狸公は夫れつ切り出掛けて來なければ腹鼓を打つ音もしないので、氣味悪いと思つたのも五六日を過ぎて最う忘れてしまつて、

「狸公は何うしたか……」

と、云ふものもなくなつた、

其中には夏の土用ともなつたので、熱い／＼と汗を流しながら、庭前へ毎朝／＼梅干をほしては夕方に仕舞ひまして二日も三日も續けて干して居ると、

或日の事、正午すぎに、俄かに一天かき曇り大夕立が今にもやつて來さうになつて來た、

素堂書伯は外出して留守だ、家内のものは空を眺めて、

「それ夕立が來さうだから早く梅干を取り込まないと濡らして了ふと大變だ……」

と、書生と下女が椽側へ嘔け出して來ると、

不思議……不思議……

雨戸を二枚はづして其上に蓆を敷き庭前に干してある梅干が椽側の隅の所に置いてある瓶の中へ一粒づつヒヨイ／＼と宙を飛んで這入るので二人は吃驚思はず、

「キヤツ……」

と、叫けんだので、奥さんが聞き付け、

「マア何うしたのです？……」

と、来て見ると、下女が彼方を指さして、

「アレ〜奥さん彼れを御覽遊ばせッ」

「何にが……」

と、見ると、庭に干してある梅干が獨りでヒヨイ〜と飛んでは椽側の隅にある瓶の中へ入るので、これも吃驚。

「オヤまあ何うしたのだらう……」

「アレ〜〜……」

「オヤ〜〜……」

と皆々あきれてしまつて遠くの方から熟と見て居ると、梅干が獨りでヒヨイ〜と飛んでは瓶の中へ這入つて居る。

其中に雲行が段々悪くなつて雨がポツリ〜と降り出して來ると梅干の飛び方はいよ〜急しくなつてヒヨイ〜と瓶の中へ飛び込む、僅か見て居る間に、蓆二枚の所へ一面に擴げてある梅干がバラ〜と悉く瓶の中へ這入つてしまつた。

「アレヨ〜〜……」

と、呆れて座敷へ逃げこむ人々、

「どうしたのであらう……」

ど、氣味悪く思ひながらも怖いもの見たさに皆々障子を閉め込
で其の破れの所より覗いて居ると、

今度は簾がヒラ／＼と飛び上り又た二枚の雨戸が自然に動い
て軒下の所へ運ばれて来た、

夕立は愈々烈しくなつたが而し此の時は梅干も雨戸も皆な濡れず
に済んでしまつたが、

餘りの不思議に家内中の人は此の梅干に手を付ける人もないやう
になり、只だ主人の戻りを待つばかりであつた、

奇怪……奇怪……何んであらう

雨が晴れると間もなく主人の素堂畫伯が戻つて来たので家人は直
ぐ様此の奇怪の物語りをした、

而して、

「宛然化物屋敷のやうで何んだか氣味が悪くて居られませんでし
たが何うしたのでせう……」

と、尋ねたが、素堂氏として其譯が分らない、

「そんな馬鹿な事があるものか……」

と、云つては見たが、多勢の人が現在見たと云ふのであるから到底も打ち消す事が出来ない、

「うむ……そうか……そんな事がある譯がないが……」

「それが有つたのですから……」

「どうも不思議ですなア……」

「妾は此んな怖い化物屋敷に居るのは怖くて堪りませんから引越しませうよ……」

と、花子夫人の談判に素堂畫伯も殆んど困つてしまつたが、今直

ぐに引越する譯にも行かぬので、

「今日は最早日も暮れる事であるから明日何とかして他の家を探ねて見ようよ……」

と、一切の事を明日に譲つて應て夕食も済んだので茶話しとなつたが、矢張り晝の事が出て、

「何んだか、今夜は怖くて……」

と、云ひ出すので、

「夫れじゃア今夜は皆で一間の裡で一所に寝るが好い、僕は何にか研究になる事もあらふから別間で一人で寝て居るから……」

と、家族を一間に寝かして素堂氏のみ自分の居間で只一人寝る事となつた。

怖いから早く寝ようと思ふので家族の人々は寝てしまつたが晝伯のみは、何にか變化の出る譯があるのであらうと思ふと、夫れから夫れと思ひが種々に動いて眠る事が出来ず、彼れよ是れよと昔の妖怪談などを考へながら時のうつるも知らずに居ると、夜は次第々に更けた真夜中頃、
庭先にて、

「コトン／＼……………」

と、雨戸を叩く音がする、
而し何んとも思はずに其まゝに居ると再び、

「コトン……………コトン／＼……………」

と、叩いて居るので、

「誰だ……………誰だよ……………」

と、聲をかけるど、

「はい私くで御座ります……………」

「私つて誰だよ……………」

「あの……………狸の老爺めで御座ります……………」

「そうか狸公か……」

「左様で御座ります……先達ては息子をお助け下されて有難う存じます、其後何にか御禮にと存じては居ましたが折が御座りませんで残念に思つて居ますと、今日は突然の夕立雨でお宅様の梅干が濡れそうに御座いましたから、大變と存じまして我れ、一族が皆んなでお手傳ひに上がったので御座いますが、突然にあんな事致したので嘸ぞ吃驚なされましたであらうと存じ一寸其事丈け申し上げに参りました……」

と、此の意外の報告に素堂晝伯も呆れてしまつた。

「うひ、そうかお前達が手傳へに来て呉れたのか夫れで漸つと分つた、實は先刻から其事で家中が心配したり怖がつたりして居たよし親切は有難うよ」

「左様でしたか夫れはどうも……」

「是れからそんな事があつたら、決して構はんから姿を現はして遣てくれよ、其方が此方で安心するから頼むよ……そうでない此の家は化物屋敷だから引越すなんて騒ぎ出すから」

「はい、畏りました、それは誠にお氣の毒さまでございました、遂ひ氣が付きませんでしたから……」

「今度はなア何でもいゝから化てなりと姿を現はして遣つてくれよ頼んで置くぞ……」

「それがね、旦那様、手前どもは兎角不器用で、可愛らしいものに化る事は出来ないもんですから……困るので」

「あゝそうだなア大概入道で出るやうだが大入道になつて出られちやア却つて怖いからなア……」

「御尤もです……」

「全體お前達は何處に居るんだい」

「私共は三河島の藪の中に住んで居ましたが今では藪を切り拓らか

れて居所を失ひ迷ひ狸となつて居所がなくなつてから此方へまどくくしては犬に追はれたり人間に目付かつたりして誠に困て、居るので御座ります」

「うむ……居所が無いと云ふのか其れは困るだらう……而して

「お前達の同類と云ふのは何匹ほど居るのだから……」

「はい夫婦小兒等親類縁者で二十匹あまり居ります」

「夫れが皆んな居所がなくて迷ひ狸になつたのか……」

「左様で御座ります誠に困難して居ますので」

「何うだい乃公の家の椽の下を貸してやるから引越して來たらいゝだ

らう……」

「マアそりや何より有難い事で御座います……左様に御親切にして頂いたならば一同の者が何れ程安心するか分りません……又た其禮と致しまして時々腹鼓位はお聞かせ申しますし、火難……盗難は屹度お引受けして防ぎまする」

「夫りやお互ひに好い事だ何時でも来るがいよ……」

「何んど嬉しい事でせう此のお慈悲深い事を皆に聞かせましたら何んなに喜びませうやらあゝ有難い……殺す神があれば助ける神があるとは此の事でせうよ……」

と、狸は非常に喜んで歸つてしまつた。

奇奇怪怪の盛蕎麥

去年は千葉縣下で飛ん、喜劇をやらかして花嫁の掘出し物を手に入れた素堂畫伯は、妙な事からして狸と親類になつたのを獨りおかしく思つて居ると、

其翌晩又もや、

「コトン〜コトン〜……」

と、雨戸をたたく音がする。

此方は最ふ馴れて居るから別に怪むこともなく、

「お、来たか……何にか用があるのか」

「はい昨晩は何も御親切様に有難う御座いました早速皆の者へ御親切の程を聞かせました所が、一同大喜びにて何卒拜借致し度いと申しますので誠に御言葉に甘へて恐れ入りますが、何卒御貸し下さいますやうに、就きましては明晩引越をして参りますから一時騒々しく御座いませうが其所のところは悪からず御勘辨下さいますやうに決してお家賃などには迷惑おかけ申しませんです……」

「アハハ、家賃とは振つた事を云ふ……流石は狸公丈けに面白い事を云ふな……お前達に縁の下を貸したら無面白い事がつづくであらうよサア、何も遠慮は入らんから何日でも来るが、い、よ……」

「どうぞお願ひ致します……」

と、出て行つてしまつた。

後に素堂氏は愈々面白い事に思つて此の機を幸ひに狸會として知人を招き小宴を催ふ事にした、夫れ、通知を發したので、其翌日の夕刻よりしてお客が續々やつて来る、そして招待したお

客が皆揃つたと云ふ頃に臺所へ、

「へいお待遠様で御座へ……」

と、蕎麥やが三十ばかりの生籠を持ち込んで来た。

「アラッ違つてよ家ぢやないよ……」

女中は注文した覚えが無いから斷つた。

「そんな事ありませんよ、確かに此方様ですよ……繪の先生の素堂様と仰有るお宅だと云つてお出になつたのですから……」

「だつて注文になんか行きやしませんわ、

と、押問答して居ると、奥に居た、

「花子夫人が聞き付けて、何うした事かと聞くとは是々でと云ふので不審に思ひながらも、

「マア待つて御覽よ、若しもお客様の中でお誂へになつたのかも知れんから……」

と、お客に向つて一々尋ねて見たが誰れも注文したものは無い、愈々間違ひであらうと、そば屋に念を押すと、

「イヤ、そんな事はありませんです繪師の素堂先生のお宅だと仰有て而も代金までも拂つておいでになつたのですから……」

「代金まで拂つて……」

「そうです……」

そばやは何うしても此方の注文だといつて動かさない、其所へ素堂先生が出て来て、

「まあそんなに押問答して居ると折角の蕎麥が延びてしまふから取つて置くがいゝや、若し間違つたら代金を拂へば夫れで何んの苦情もなく済む事じやないか……」

と、云はれて、花子夫人も尤もに思ひ、

「夫れでは恰度お客様も在つしやるから貰つて置ませうよ、若し違つたら後で云ふておくれ……」

蕎麥やは歸つていった。

「さあ恰度好いお客様へも上げてくれッ……」

と、其譯を話したので、

元より風流人ばかりであるから、

「迷子そばとは振つて居る……」

と、一同も喜んで食べてしまった。麩て會も最と賑かに開かれて夫れくの藝づくしに興を極めて散會となり、各々歸宅した後で、家内の人々は再び蕎麥の話をはじめて笑ひなごして、座敷を片付けて程なく眠りに就くと、

「コトシ〜……」

と、例の雨戸をたたく音、

素堂氏は夫れと悟りて、

「お、狸公か……何んだ」

「ハイ種々御親切に有難う御座いました。就きましては、今夜引越を致しましたから何卒何分宜しく御懇意をお願い申します……」

「アハハ、引越の挨拶か」

「ハイそして先刻お印として蕎麥を三十お届けしましたが、さぞ御不審でございましたでせう……」

と、此の一事ではじめて迷子蕎麥の身元が分つたのだ。

「そうか先刻の蕎麥はお前がよこされたのか驚いたね、随分な洒落をやらかすな、而し有難う、だがね狸公あんなして蕎麥屋へ代金を拂つたそうだが、その金は本物で拂つたのか夫れとも木の葉か何かの偽金を拂つたのか、若し偽せ金なんか拂つたのだと直ぐに警察へどやけられて探偵に尾かされると大變な事になるから……」

「先生其御心配は御無用です金は正しく本物で拂つたのですから大丈夫です、御安心下さい……」

「そるか、お前達に金を拂はせるなんて飛んだ事だなア……まあ

戀の決闘終

食つてしまつたから仕方が無いが、此の後近所で買ひ物なんかして
 くれるなよ怪しまれると困るから……」
 「畏まりました……」
 ど、話しは茲に濟んで双方ともに眠りに就いたが斯うして居る中
 に妙な噂がバツと立つて早くも警察の知る所となり探偵の耳にも這
 入つて段々探つて見ると、狸公の仕業と知れて大笑ひに終はつた。

大正七年一月十八日印刷
 大正七年一月廿三日發行

定價金貳拾錢

不許複製

庫文偵探界世

戀の決闘

編者	牛田照雄
發行者	鈴木與八
印刷者	加藤敬直
印刷所	大博堂印刷所

東京市淺草區南元町三十番地
 東京市芝區南佐久間町二丁目十一番地
 東京市谷區南佐久間町二丁目十一番地

發行所

東京市淺草區南元町三十番地

盛陽堂書店

電話下谷六一六八 振替東京一四七〇六

大泉清先生著

卵を多く
産ませる

素人養鶏

菊判形美本
紙數百頁
定價三十錢

近時非常に養鶏の流行して來ました。その商賣的なる者も、分つたり道樂的にする者も、共に經濟上喜びし事と云はれ、なりまして、老に及ぶまで、誰に、へば、飼ふ程、金儲かる、又、新、し、で、今迄、に、思ふ、養、の、本、が、有、り、ま、し、た、が、本、書、は、其、の、名、の、通、り、方、は、是、非、共、此、素、人、養、鶏、法、に、依、つ、て、御、始、め、な、さ、る、御、進、め、申、す、

發行所 盛陽堂書店

東京市淺草區南元町三十番地
電話下谷六一六八番
振替東京一四七〇六番

終

